



Vol.18 No.2
 発行人 笹生 衛
 編集人 渡邊 卓
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

公開学術講演会

現代社会と自然災害における神社

稲場圭信(大阪大学大学院教授)

令和六年度の公開学術講演会では、大阪大学大学院教授の稲場圭信先生をお招きし、「現代社会と自然災害における神社」という題目でご講演を頂いた。現代の日本においても、宗教は地域の中で人と人をつなぎ、支えるはたらきを果たしているが、本講演会は、こうした宗教

のソーシャル・キャピタルとしての側面をあらためて考えることを目的としたものである。稲場先生は、宗教の社会貢献について研究を進めてこられており、特に近年は、宗教の自然災害への対応や、被災のための取り組みなどについて、実際の現場に精力的に足を運びながら調査、研究を進め、その成果を発信されている。また「宗教者災害支援連絡会」や「未来共生災害救援マップ」などの実践的な活動にも積極的に関わっておられる。

講師の稲場圭信先生

ご講演では、先生が現在取り組んでおられる「共生学」の目指すところや、日本における宗教のあり方などに触れられた後、具体的な例として、令和六年能登半島地震の際の活

動が取り上げられた。多くの神社やお寺が、自らも罹災しながら避難場所、避難所になったこと、長年の活動の蓄積を受けて、宗教者による災害支援が早い時期から行われたこと、そしてとも地域社会の中に根付いていたからこそ、そうしたことが可能になったことなどが述べられた。これを受けて、単に防災・減災だけに目を向けるのではなく、神社が平常時から地域社会との結びつきを深め、

地域と共にある神社としてソーシャル・キャピタルを醸成していくことよって、非常時・災害時に、地域との連携が可能になるとお話になった。
 なお、講演の詳細については、『国学院大学研究開発推進機構紀要』第十七号(令和七年三月)に掲載するので併せて参照されたい。

(文責: 星野靖二)

公開学術講演会

現代社会と自然災害における神社 稲場圭信(大阪大学大学院教授)

第四十九回 日本文化を知る講座

(1) 神輿・祭礼の発生と展開―その歴史的な背景と意味、災害との関係から
 (2) 祭り・継承・まちづくり
 (3) 神輿がつかなく地域のみまとも未来

調査研究

伊豆研究の新展開―美伊豆との連携事業を中心に
 学術資産を活用した吉田家・吉田神道研究への展望
 アジア製造技術史学会・国学院大学博物館共催学会
 「アジ鑄」東京大会開かる―博物館で特集展示も

教育普及

学術資料センター(神道資料館部門) 公開シンポジウム
 古代伊勢斎宮の歴史とまつり

研究開発推進センター「古典文化学」公開講演会 霊峰英彦山と地域社会

日本文化研究所国際研究フォーラム

つむがれる宗教文化―生み出されるカタリとカタチ

研究開発推進センター第三回しぶカフェ

渋谷の農と食が育むまちづくり―都市から「未来を耕す」試み!

出版

「いそのかみ」―少年時代の大場磐雄と考古同人誌

資料紹介

卒業アルバム の整理

集 報

往 還 モンゴル襲来750年

目次

星野靖二…1	星野靖二…10
笹生 衛…2	宮本誓士…11
小林 稔…3	糸数葉菜・高良未来…12
黒崎浩行…4	比企貴之…13
吉永博彰…5	池田榮史…16
大東敬明…6	
楠惠美子…7	
木村大樹…8	
渡邊 卓…9	

第四十九回 日本文化を知る講座(1)

神輿・祭礼の発生と展開

―その歴史的な背景と意味、災害との関係から

笹生衛 (研究開発推進機構構成員・神道文化学部教授)

一、はじめに

神輿は、神が移動するための乗り物であり、日本の祭礼を象徴するものである。民俗学者の柳田國男は『日本の祭』(弘文堂書房、一九四二年)において、御幣を立てた神馬が古い形式で神輿は後出の要素であるとした。この発想は、御幣が神の「依り坐」であるとの神観にもとづくものであるが、このように考えて良いのだろうか。

本報告では、神輿と祭礼が成立した歴史的な背景と、その意味について考えた。

二、移動する八幡神

『古事記』『日本書紀』や『延喜式』などからうかがえる古代の人々の神観念は、神は基本的に特定の場所・自然環境(山・川・島など)の働きと密接に関係するものであった。

一方、『続日本紀』天平勝宝元年(七四九)条には、東大寺の大仏(盧舎那仏)建立を助けるとの託宣を下し、八幡神が九州の宇佐(大分県)より移動したことが記される。この途上の諸国では、殺生が禁じられ、その移動に従う人々には酒・穴(獣肉)を与えず、道は掃き清められている。ここから、八幡神は道を移動したことがわかる。同年十二月二十七日条には、八幡神の「禰宜尼大神朝臣杜女」が東大寺を拜んだことが記される。この時の輿は天皇と同じものが

用いられたと解釈でき、同条には八幡神のことは見えないが、宇佐から移動してきた八幡神も同じ輿で移動してきた可能性が高い。

三、神輿の出現

神の移動手段としての神輿の最古の資料は、『本朝世紀』(藤原通憲編)の天慶八年(九四五)七月二十八日条であろう。ここには、志多良神・小藺笠神・八面神の神輿が移動していると、摂津国の国司が上申した文書が収められ、鳥居と檜皮葺きの屋根を備えたものであるという神輿の形状も記される。これは小型で運搬可能な神社としての形であった。その他の二基は檜の葉で屋根を葺いた屋形のみで、先述の神輿を省略したものといえる。

神輿は多くの人々が担ぎ、捧げ物の「幣」を持つ人々、歌舞の一団が従うものであった。このような人々の動きの背景として、天慶年間を含む九世紀後半から十世紀代にかけて洪水・干魃・疫病の蔓延といった災害が多くなったことを挙げることができる。『日本紀略』からは、九世紀末から十世紀にかけて日本列島では自然災害が頻発・激甚化していることが読み取れる。中塚武氏は、年輪セルロース酸素同位体から中世日本における気候変動を分析し(「中世における気候変動の概要」『気候変動から読みなおす日本史4 気候

変動と中世社会』臨川書店、二〇二〇年)、十世紀の気候環境は、過去二〇〇〇年間で最も強い乾燥傾向である反面、突発的な湿潤傾向も発生したことを明らかにしている。これによっておこった旱魃・洪水・飢饉・疫病の蔓延という深刻な災害の連鎖は、生命の危機を感じる社会不安を増大させただろう。

正暦五年(九九四)には疫病を鎮めるために御霊会が行われ、ここでも神輿が用いられている。これ以前の天延二年(九七四)には、疱瘡の流行から人々を護るために祇園社(八坂神社)の神を平安京に招く御旅所祭祀がはじめられている(『社家条々記録』)。この神の移動には神輿が用いられた可能性がある。

このように見れば、十世紀に明確となる神輿で神が移動する祭りは、災害の連鎖・激甚化に対応するため、平安京の都市民や畿内の一般の人々が始めた新しい形態であったといえる。

四、神輿渡御行列の確立

十世紀後半から十一世紀初頭にかけて、稲荷社(伏見稲荷大社)、松尾社(松尾大社)などでも御旅所祭祀が始まる。

十二世紀後半、後白河上皇の時代に制作された『年中行事絵巻』には、祇園御霊会・稲荷祭の様子などが描かれている。ここにみえる、神輿に捧げ物(御幣など)を持つ人々や芸能が従う形式は、先述の十世紀前半におこった志多良神などの神輿の移動と共通する。この形式が平安京の人々に受け入れられ、十一世紀から十二世紀前半までに平安京内の御旅所祭祀の「祭礼」として定着していった。そして十二世紀後半段階では、意匠を凝

らした傘・笠(風流傘・笠)といった「造り物」の要素が確認できるようになる(『年中行事絵巻』)。神輿についても『年中行事絵巻』から、大きく分けて四つのタイプに分類することができる。

このように、平安京において御旅所祭祀が展開した背景には十一世紀から十二世紀までの平安京の経済的な発展と、平安京内には著名な大社が鎮座していなかったことを挙げることができる。平安京に直結する滋賀県塩津港遺跡(琵琶湖北岸)では十二世紀初頭以降、急速に港湾施設が整備拡張されている。これは、平安京をめぐる物流が急速に発展したことを示し、また平安京の経済的な発展を反映したものであったと考えられる。経済的に発展をした都市民は、身近に親しく信仰する神を求め、平安京に隣接する祇園社ほかの神格に京内へ移動していた必要性が生じたのである。

五、まとめ

米国の人類学者のジョセフ・ヘンリックは、戦争や地震といった災害と、宗教的なものへの関心の高まり、儀式への参加者の増加、宗教集団の成長との関係を論じており(『WEIRD 現代人』の奇妙な心理(下))『白揚社、二〇二三年(今西康子訳)』)、この論は平安京の都市民による祭祀組織の形成・発展とも対応するように思われる。

また、このような神輿を用いた祭りは、各地の主要な神社へと伝播し、さらに地方の荘園や村落の鎮守の祭祀として定着していくこととなる。それが、神社祭礼の一つの形として伝統的に受け継がれ、現代へとつながったといえる。

第四十九回 日本文化を知る講座(2)

祭り・継承・まちづくり

小林 稔(國學院大學観光まちづくり学部教授)

一、はじめに

現代社会において、地域の人びとが「同じ方向を向く・向ける」機会といったとき、何があるのだろうか。おそらく今や、それは「祭り」に収斂される。古風・今風、その形態は如何様であれ、そこにコミュニティの内発力を期待し、地域の活性化や紐帯、交流の手立てを求めようとする動きは、昨今の社会の漸減や膠着を覆す、一縷の望みとなりつつある。

ご存知のとおり、道普請や潑潑といったムラ仕事、田植えや稲刈り、暮れの餅搗きにみるユイやスケ、あるいは祝儀・不祝儀、番と衆、連や講中にもなう手伝いや賄い、これら様々な人間関係を背負った慣習は、社会の変貌によって訥々となっており、そこに活路を見出すとするのは、やはり無理筋というほかない。俯瞰すれば、そもそも祭りとは、そうした協力関係とはまた別に、転換や持続の発現といった実効力を備えているのであって、単に「人群れ集う場」と置き換えられるものでもない。

二、祭りを振り返る

祭りの語源はマツラウだという。マツラウとは古語で、服従や勤仕というような意味である。祭りとは、お側にいて奉仕することであり、その本義とは感謝や祈り、慰撫のために神を迎えて饗応し、一体となって多幸恍惚にあふれ、お帰り

いただくことであつた。おもてなしが日本の文化だという淵源はここにある。

そしてこうした祭りの日には、普段、口にしないものを拵え、神仏に供え、神人ともども慶び勇み、これにあずかることでお力をいただいた。食を通じて神霊と繋がることにより、自らの魂に生気を吹き込み、活気を取り戻していく。そうしなければ人はやがて憔悴に陥る。つまり、祭り／神ごとには繰り返すべき必然性があつたのである。このような神々との交歓は、祭りや諸行事の根幹だつた。今風にいえばフレッシュユともなるうが、ここで留意すべきは神ごと＝浄化・活性というコンテクストである。

三、循環的社会と伝統性

祭りや行事を理解するにあたり、「共生」や「循環」といった事象的特性は、重要なキーワードである。季節をめぐる自然の摂理に則り、相互扶助のもと、神ごとに添いつつ日々送るといった暮らしのあり方は、まさに共生的であり循環的であつた。そして、共生がもたらす画一性は共同体としての共通感覚を養い、循環性はその継承を培った。同じことを繰り返す、同様に試みるという文脈において、いわばそれ自体、そもそも属性としての伝統性を内包していたといつてよい。そして、そこで育まれた価値観とは、絶えなき社会の希求であつた。

この意味で、伝統とは「永続」の表象として受け止められ、掛け替えない命題や志向性を帯びた言葉として響き渡ってくる。伝統とは不変ということではなく、継承と時間の累積認識であつて、循環的社会においては掛け替えない秩序と支配力を有していた。付言すれば、伝統は持続可能性とも背中合わせとなっており、その今日的課題とは、今に生きる我々が当該社会の仕組みとして、どう取り込んでいくかにはかならない。

四、祭りがもたらすもの

祭りが地域にもたらすものとは、何だろうか。大局的にみれば、およそ次の四点到に集約できるかと思う。

- ① 暮らしのリズム
- ② 地域や個の活性化
- ③ 統合と秩序維持
- ④ 記憶の反芻

である。①は稽古や精進潔斎等も含め、いつまで何をといった、生活上に目的や計画性などを、②は、内発的には晴れがましさと達成感・高揚感など非日常的感情の誘発、加えて社会貢献や神への奉仕等、献身からくる心身の充実感など、そして外発的には交流効果や経済効果などをもちた。③は、人びとの協力・協調に紐づく信頼や規範、関係性の維持回復・再構築などを、④は、共通認識や価値観・世界観の再確認、そして回想や想い出・肯定の蓄積等々を生み出すものである。ことに記憶の反芻は、次第に伝統と一体化し、ときとして「信じる」ことの正統性や真正性を呼び覚ます。

五、祭りとレジリエンス

これをレジリエンス(回復力)の観点

からみてみる。3・11といえは東日本大震災(二〇一一)、私たちはこれを忘れることはないだろう。ここから地域の復興と祭りや民俗芸能との相関関係を論じたものは枚挙にいとまがない。熊本地震(二〇一六)のときもそうである。熊本城の崩落は象徴的だったが、ここではあえて「こんなときだからこそ」といつて、その年、阿蘇神社の御田祭りは斎行された。これが礎となつて、その後人びとは心をひとつにできたという。

そして、かの能登半島地震(二〇二四)。正月早々、激災に襲われるなか、中旬には早くもキリコ祭りの存続を案じる報道が流れた。半島およそ二〇〇ヶ所にわたる地域祭礼であるが、その先陣を切る通称あばれ祭り(能登町)は従来どおりの七月初旬、挙行に至っている。賛否両論あるなか、「前を向きたい」「元に戻したい」とする地元の決断だつた。このことは、地域の活性とは必ずしも営利目的に準拠しないことを物語っている。

六、おわりに

祭りとは、それ自身が社会的共通資本であり、地域の表象・人びとの「認識の回路」といった機能性を持ち備え、ソーシャルキャピタル(絆)や地域アイデンティティと密接に結びつく。とりわけ、見る×見られる(交流)ことで触発される地域アイデンティティの醸成は、持続や継承、あるいは伝統意識、地域の誇り・宝といったキーワードと折り重なっている。根生いの文化の発展的継承は、まさに「まちづくり」にとつて重要な意味を持ち、人間が人間らしく生きていくための智慧の塊根と解すべきことである。

第四十九回 日本文化を知る講座(3)

神輿がつなぐ地域のいまと未来

黒崎浩行(國學院大學神道文化学部教授)

一、はじめに

少子高齢化、人口減少が日本社会の持続可能性にとって重大な問題であるという認識はつとに広く共有されている。平成二十六(二〇一四)年の日本創成会議による「消滅可能性都市」八九六自治体の公表が大きな反響を呼んだのもその一つである。令和六(二〇二四)年には人口戦略会議による地方自治体「持続可能性」分析レポートが公表され、そこでは「社会減」対策と「自然減」対策の双方が重要であることが強調された。

他方、平成二十三(二〇一一)年三月十一日の東日本大震災、直近では令和六(二〇二四)年一月一日の能登半島地震をはじめとして、日本では大規模災害が相次いでいる。災害は、その地域に生きる人々が培ってきた文化に深刻なダメージを与える。しかしその半面で、災害を生き延び、ともに復興に向かうためのよりどころとして、地域で培われてきた文化が活かされることもある。その可能性の条件をさぐることは、日本社会の持続可能性を考えるうえで大きな意義がある。

ここでは、主に東日本大震災の後に復活・継続しつつ再編されていた神輿渡御を伴う祭礼をとりあげつつ考えてみたい。

二、慰霊・鎮魂を伴う神輿渡御

岩手県大槌町では、毎年九月に「大槌まつり」と称して小槌神社例祭・大槌稲

荷神社例祭が行われてきた。神輿渡御には郷土芸能(虎舞、大神楽、鹿子踊、七福神舞など)の奉納が伴う。平成二十三年は津波被災により大槌稲荷神社の神輿渡御は行われず、小槌神社では境内とそ附近でのみ神輿渡御と郷土芸能の奉納が行われた。神輿の担ぎ手(社人)の装束はインターネットを通じた寄付によって誂えられ、郷土芸能団体の山車・装束の修復には民間団体・ボランティアの支援が集まった。翌年には大槌稲荷神社の神輿渡御も復活した。鹿子踊は、新仏の出た家の前で慰霊の踊りを踊った。

宮城県名取市閑上では、湊神社の社殿が津波により流失し、日和山の山頂に富主姫神社とともに仮社殿が建てられた。平成二十四年十月の湊神社例祭では担ぎ手のボランティア支援も得て神輿渡御が復活した。流されて更地となった住宅の跡に設けられた献花台の前で神輿をさす姿が見られた。

三、地域外からの協力による神輿渡御の復活・継続

宮城県女川町鷲神地区では、平成二十四(二〇一二)年五月三日、熊野神社の例祭神輿渡御を約一三〇人のボランティアが支援した。多くは、被災直後から女川町を訪れて支援活動を行ってきた個人・団体と、その呼びかけにより集まった人々であった。獅子振り団体の

リーダーでもある副総代長が中心となってボランティアを迎え入れ、継続的なつながりを持った。令和二、四年は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、神輿渡御を中止したが、令和五(二〇二三)年五月三日には再開した。約七十名のボランティアが集まり、三基の神輿が氏子区域内を巡行した。

宮城県気仙沼市唐桑町宿地区では、津波により六十二世帯中五十四軒の家が流され、六名が死亡した。早馬神社は社殿が浸水したが、流失は免れた。氏子は主に漁業、水産加工業を生業としている。毎年十月第一日曜日に行われる神幸祭は、氏子たちの励ましにより、例年通り再開することとなった。神幸祭では神輿渡御が行われるが、担ぎ手は宿地区住民だけではなく、漁業協同組合青年部を中心とする「早馬神輿会」メンバーなどからなっている。日程も約十年前に参加しやすい週末に変更されており、従来から進んでいた人口減少に対応する形がとられていたことが、継続の要因となった。

四、災害後の地域の再編と神輿渡御コースの変更

宮城県気仙沼市小泉地区では、津波により大部分が流失した町区の住民により防災集団移転が実現した。その完成に伴い、平成二十九(二〇一七)年より、八幡神社の例祭神輿渡御も集団移転先の団地をまわるようにコースが変更された。それだけでなく、氏子区域の全域をカバーするように在区、浜区もまわるようになった。平成三十(二〇一八)年には、在区にある高齢者福祉施設もコースに加えられた。こうした変更は宮司、氏子総

代、住民自治組織の役員らによる話し合いによってなしとげられた。

五、むすびにかえて

災害後の地域コミュニティの再編のなかで、地域をくまなく巡る神輿は、老人から子どもまで、さらには死者をもコミュニティに包摂する役割を果たしていることがうかがえる。

他方で、祭礼の継続には地域外からの協力が伴っていることも見逃すことができない。

こうした二側面は、持続可能な社会づくりのために「自然減」対策と「社会減」対策の双方が必要であることも呼応しているように思われる。



宮城県女川町・鷲神熊野神社例大祭神輿渡御(平成25年5月3日)

調査研究

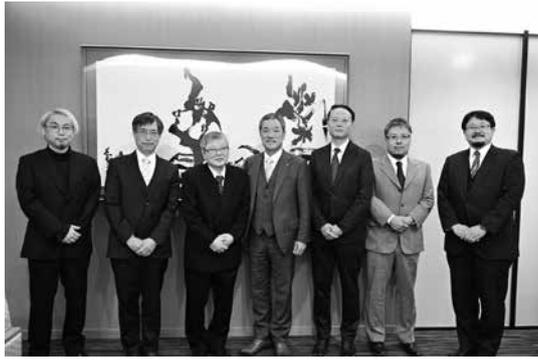
伊豆研究の新展開―美伊豆との連携事業を中心に

吉 永 博 彰

國學院大學は令和六年四月一日付で、研究開発推進機構を窓口として、一般社団法人美しい伊豆創造センター(略称、美伊豆)と包括連携に関する協定を締結した(本紙Vol.18 No.1 通号35号・一頁参照)ここでは、協定に基づく研究交流と同センターとの関係を基盤にして、新たに始動する伊豆研究の展開について紹介する。

今年度の連携事業の一環として、同十月三十一日、美伊豆の代表理事(会長)・菊地豊氏(伊豆市長)ほか関係者による、本学への表敬訪問が実施された。

今回の表敬訪問は、四月の協定締結を



表敬訪問を記念した写真撮影
(中央が菊地豊会長、その左側が針本正行学長)

記念したもので、本学側は針本正行学長、笹生衛研究開発推進機構長ほか担当教員が応対した。伊豆地域と本学との関わりをはじめ、人的リソースや研究資源の相互提供など、研究協力体制の構築等も話し合わせ、親睦・交流が図られた。

一、伊豆半島ジオパークと文化遺産

研究計画策定の土台となる、美伊豆の活動趣旨と文化遺産の課題に触れる。美伊豆は伊豆半島全体の持続的な発展への貢献を目的とした組織である。ジオパークの基本的な理念である持続可能性を尊重した観光と地域活性化を柱に、

○伊豆半島地域の大地の遺産とそれによって活用する事業

○伊豆半島地域の自然・文化・歴史・産業等の情報収集と情報発信に関する事業
ほかを推進している。「ジオパーク」は、地質学的にみて国際的な価値のあるサイト(場所)を対象に、保護と教育、持続可能な開発を一体的に管理するエリアを指すが、自然地形や生態系だけでなく、それらに根差して受け継がれてきた地域に伝わる言説や風習・信仰をはじめ、そこで営まれてきた人々の文化的・歴史的な活動の所産、いわゆる有形・無形の文化遺産も、重視な構成要素とされている。

二、地域の文化遺産をめぐる課題

ところで、昨今の日本社会は急速な少子

高齢化と人口減少の時代を迎え、大都市圏・地方部とも、一部で消滅可能性が提唱される。特に、産業・雇用等の経済問題も背景に、地方からの人口流出は止まらず、現況の日本社会の維持は危ぶまれている。

結果、伝統的な地域コミュニティの置かれた状況も、年を追うごとに厳しさを増す。半島と諸島で構成される伊豆地域も例外でなく、域内では高齢化・人口減少や雇用の創出が深刻な課題となっている。こうした社会・経済問題に加え、頻発する地震・風水害や、噴火といった大規模災害により、地域コミュニティの存続をめぐる社会の枠組みは、近年、大きな揺らぎをみせているのである。

伝統的な地域コミュニティの衰微により、伝承されてきた文化活動も担い手を失い、文化遺産の継承・保全が厳しい状況にさらされる場面が増加しつつある。無形に比べ、有形文化遺産の場合は博物館等への収蔵により保全の対応は可能となるが、各地域の関連施設の収蔵能力には限界があり、また寄託により地域社会と離れることで、地域の宗教的コスモロジーにおける文化遺産の成立背景も喪失が懸念される。

右の社会的な課題への対応と、本学が蓄積してきた島嶼部も含めた伊豆地域に関する研究成果の活用・地域連携を背景に、社会的な課題への対応を目指し、宗教的な歴史文化遺産をテーマとした新たな研究計画を作成するに至った。

三、新展開する伊豆研究の概要

前記の社会事情と研究状況に則して、國學院大學研究開発推進機構では、学術資料センターを核に、従前の研究成果を基

盤とし、美伊豆ほかの関係機関や研究者・現地協力者との協働を通じて、令和七年度より「宗教文化の研究と継承―伊豆半島・諸島を中心に」を新たに始動する。これは、伊豆地域における歴史的な宗教文化遺産の調査・考察を学術的な裏付けとし、有形・無形の宗教文化遺産の保全と活用を視野に入れたプロジェクトである。

本学では伊豆地域に係る多数の研究実績があり、そうした知見に基づき、近年は國學院博物館での特別展の開催等を推進してきた。この度のプロジェクトも、宗教的な歴史文化遺産をテーマに研究を推進していく点では、これまでの研究事業の流れを汲む。ただし、伊豆地域の社会事情や大規模災害への対応を見据え、地域文化遺産の持続可能な保護・活用策の模索も目的とする点、すなわち地域連携を当初から視野に入れる点が、本プロジェクトの新規性であり、大きな特徴と考えられよう。

四、科学研究費助成事業への応募

事業規模や学際性、公益性などを踏まえ、学内の研究事業とは趣旨を同じくして並行する形で、学外の研究助成による推進を目指している。具体的には、学内外の研究者による参画・協力を得て、研究課題「コミュニティと宗教文化遺産の継承に備えた民間官学協働研究―伊豆地域をモデルに」を作成し、日本学術振興会の科学研究費助成事業に応募した。申請中につき、委細は避けたいが、採択による一層の研究推進と課題対応を通じた地域協力が期待される。

研究開発推進機構助教

学術資産を活用した吉田家・吉田神道研究への展望

調査研究

大東 敬明

一、吉田家・吉田神道とは

吉田神道は、室町時代に吉田兼俱(一四三五～一五一一)が創唱した神道である。唯一神道・卜部神道・宗源神道とも呼ばれた。兼俱は朝廷の神祇官であり、吉田神社(京都府)の神職でもあった。吉田家は卜部氏の一流であり、卜部氏には吉田流のほか、平野流がある。卜部氏は亀卜(占いの一種)の家として神祇官内での地位を獲得し、やがて『日本書紀』をはじめとする古典や神祇に関わる故実の家としての地位を確立していった。兼俱の曾祖父にあたる吉田(卜部)兼熙(一三四八～一四〇二)は「神道の元老」と称され、卜部氏・吉田家の地位を固めた。

兼俱の吉田神道は古典や神祇・神社に関わる知識に、密教・道教などの思想・儀礼を加えた新たなものであった。孫の兼右(一五一六～七三三)、その子の兼見(一五三五～一六一〇)は、各地の神社や為政者との関係を強めていった。

このような地域神職や為政者との関係を基盤とし、その地位を確立していく。寛文五年(一六六五)七月に出された「諸社禰宜神主等法度(神社条目)」の第三条には、「無位の社人は白張を着ること、その他の装束は、吉田家からの許状をもって着るべきこと」とある。このため江戸時代、吉田家は神社神職に対して大

きな影響力を持つこととなった。

二、本学の研究・所蔵資料との関わり

このような点から、現在の神社や祭祀、神道思想の展開を考える上で吉田家・吉田神道は重要である。

明治二十七年(一八九四)に國學院を卒業した江見清風(一八六八～一九三九)は、『國學院雜誌』十七卷(明治四十四年)に「唯一神道論」を十二回にわたって連載した。これは、吉田神道についての基礎研究となり、江見の没後に刊行された論文集『神道説苑』(明治書院、一九四二年)に収められた。

本学で教鞭をとった神道史学者の宮地直一(一八八六～一九四九)は、吉田家あるいは、その家老を務めた鈴鹿家の文庫調査を進めた。彼の講義案である「吉田神道綱要」(写真1)は、宮地の没後に刊行された遺稿集のうち、『神道史下(一)』(理想社、一九六三年)に収められた。この「綱要」は昭和十六年(一九四一)の講義案をもとにしており、國學院大學はその自筆本を所蔵している。自筆本を見ると頭注など、遺稿集には翻刻されていない部分もあることがわかる。

宮地の教え子で本学の教授となった西田長男(一九〇九～八二)は宮地とともに調査を進めた。吉田神道に関わる資料をまとめた『吉田叢書』では、全五編のうち、第四編までの編纂実務を担った。

西田の没後は、岡田莊司本学名誉教授が第五編を担った。

本学図書館には、吉田家あるいは鈴鹿家旧蔵の典籍や古文書が収められている。このうちには武田祐吉博士旧蔵・宮地直一博士旧蔵資料も含まれる。令和三年に寄贈された西田長男博士旧蔵資料(國學院大學博物館所管)の中にも、兼俱の子・兼致の日記(自筆)である『兼致朝臣記(文明十六年^{又十一月朔月})』(写真2)をはじめ、それらは含まれている。また、既述の神社条目に記された「許状」(神道裁許状ほか)なども本学は所蔵する。吉田家・吉田神道に関わる資料の一部は、平成二十九年に國學院大學博物館で開催した企画展「吉田家・神道と典を伝えた家」國學院大學図書館所蔵吉田家旧蔵資料」で展示した。

また、これらの学術資産や吉田家・吉田神道の研究は、本学研究開発推進機構内でも行われている。

校史・学術資産研究センターにおいては、本学図書館が所蔵する吉田家旧蔵史料の調査・研究が進められている。学術資料センター(神道資料館部門)では國學院大學博物館所蔵の「許状」や吉田家からの伝授に関わる資料、鈴鹿家旧蔵の装束、西田長男博士旧蔵資料の調査・研究を進めている。このほか、令和六年度には、吉田家歴代の墓所(京都府)の調査を行い、また本学が所蔵する吉田家の人々を描いた肖像画を國學院大學博物館で展示した(特集展示「吉田家の人々」)。研究開発推進センターでは、令和五年度に宮地直一博士旧蔵資料の調査を行い、その成果を同センターの紀要(十七号)

で公にした。ここでも吉田家旧蔵資料を扱っている。

このような状況の中で、互いの情報交換と学外の研究者を交えて、「吉田家・吉田神道」の研究会を行うこととした。基本となるのは資料であり、今後、本学の学術資産と、これまでの研究を基礎として新たな学術交流の場を創出し、その研究成果に基づき展示を國學院大學博物館において行いたいと考えている。

研究開発推進機構教授



写真2 『兼致朝臣記』

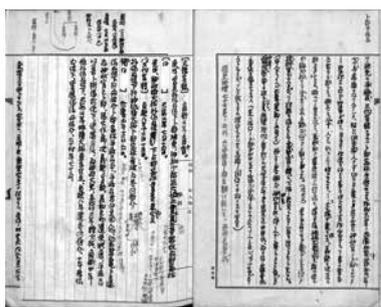


写真1 宮地直一「吉田神道綱要」
(『神道史 室町時代之』)

「アジア鑄」東京大会開かる―博物館で特集展示も

楠 恵美子

調査研究―アジア鑄造技術史学会・國學院大學博物館共催学会

二〇〇七年に発足したアジア鑄造技術史学会(会長…藤丸詔八郎)は、日本・韓国・中国・インドなどの研究者が所属している国際学会である。これまでに十七回を数える大会は、日本国内のみならず、数年おきに韓国・台湾・中国でも開催されてきた。先の第十六回奈良大会に続く今回は、東日本での実施が検討される中、実行委員らと協議した結果、國學院大學博物館との共催事業として、六年ぶり三回目の東京大会(実行委員長…吉田広)を開く運びとなったのである。

一方、開催期間が敬老の日の連休と重なり、大人数でのエクスカージョンを実施することが困難となった。そこで、國學院大學博物館収蔵資料の再整理事業とともに進めつつある青銅器の理化学的分析結果について、関連の特集展示を実施することとし、学会の開催と併せて本学の研究成果を公開することとした。

一、大会の概要

この東京大会は、二〇二四(令和六)年九月十四日(土)・十五日(日)の二日間に亘り、渋谷キャンパス常盤松ホールを会場として実施した。十四日の午前、学会の全体会議である総会が行われ、午後より研究発表がスタート。十五日にかけて日中韓の青銅器を中心とした鑄造製品と、その技術に関する研究が計十九本発表された(アジア鑄造技術史学

会二〇二四年八月三十日発行『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』第十七号参照)。会場内外をオンラインで繋いでの発表は、一時音声トラブルなどがあつたものの、大過なく終了。十四日夕刻には、カフェラウンジにて情報交換会も開いて懇親を深めた。

二、博物館所蔵銅鐸の分析

今大会では、本学関係の研究結果として「國學院大學所蔵 伝滋賀県大岩山出土銅鐸の鉛同位体比分析―突線鈕式銅鐸からみた弥生時代中期末から後期における青銅器の製作と埋納―」を発表。楠恵美子「大田区教育委員会」、渡邊緩子・隅英彦「日鉄テクノロジーズ株式会社」、平尾良光「帝京大学」、深澤太郎「國學院大學」による共同研究として、二〇二一(令和三)年に実施した伝大岩山銅鐸の鉛同位体比分析と、付着砂礫の蛍光X線分析成果をリリースした。その内容は、特集展示と連動しているため、次項にて詳細を述べたい。

三、研究成果の特集展示

近年の青銅器研究では、考古学的な検討に加えて、理化学的な分析による客観的視座に基づく研究が進展している。目下、國學院大學博物館が収蔵する青銅製品についても、原材料の産地、製品の鑄造技術、そして出土状況などを解明するための取り組みを進めてきた。そこで、

アジア鑄造技術史学会東京大会特集展示「科学分析データに見る青銅器―館蔵資料の最新研究―」(九月十日〜十月二十七日)では、出土地不詳資料の来歴が概ね確定できたものや、製作技法の詳細が詳らかとなった事例を中心に、最新の研究成果を報告した。なお、この特集展示は、國學院大學学術資料センター事業(研究代表者…内川隆志)、および科研費「高精細3Dデータ検証による東アジア四千年の青銅工芸・彫刻の造形美と技術の通史研究」(研究代表者…三船温尚)、同「古代青銅器の高精度3Dデジタルデータを活用した凝固解析による注湯技術の解明」(研究代表者…長柄毅一)による研究成果の一部を含んでいる。

(1) 青銅器と科学分析

まずは、青銅器の鑄造や、青銅器の理化学的分析に関する概要について、銅・錫・鉛の標本とともに例示。鑄造の工程と、主要な分析技術について解説した。

(2) 伝世銅鐸の出土地を探る

また、この大会にて楠らが研究発表を行った伝大岩山銅鐸の鉛同位体比分析では、中国華北地方の「A領域」、とりわけ「a領域」の鉱山に材料の由来が求められた。特に、当銅鐸が該当する突線鈕一式銅鐸は、出土青銅器の原料が「a領域」由来のものに集約されつつある過渡期にあたり、最新の原料を用いて生産されたことがわかる。銅鐸を横倒しにし、試料サンプリングした内面突帯を見せることで、銅鐸本来の金色に輝く色彩も示すことができた。

(3) 鏡の来歴を探る

館蔵資料の再整理に際して、渡辺夏海

が岡山県丸山古墳出土鏡である可能性を報告した内行花文鏡の鉛同位体比分析を試みた結果、中国華南産の金属材料を用いていることが明らかとなった。これは、前期倭鏡の測定結果として矛盾ない。とりわけ他の丸山古墳出土内行花文鏡と測定値が近似する事実は、金属材料の入手・鑄造・副葬プロセスの共通性をも示唆する。丸山古墳出土鏡群には同範鏡が存在するなど、考古学的知見からも製作工房の近似性を見出すことができよう。

(4) 和鏡・柄鏡の製作技法を探る

服部和彦氏から寄贈された二千年点及ぶ和鏡・柄鏡コレクションは、平安時代後期から幕末に至る作品を網羅しており、和鏡・柄鏡史を俯瞰できる好資料群と言えよう。三船科研による蛍光X線分析では、十二世紀前半の和鏡は銅・ヒ素・鉛・錫といった成分が、特に均一性を持たずに資料によって多様な成分濃度を見せている。一方、十四世紀後半から十五世紀前半以降の和鏡は、主に銅が多くなり、他の成分が極めて少なくなる事実を明確にした。長柄科研による3Dスキャニングからは、目視できない精度で厚みや鑄造痕跡を記録することに成功。湯流れ(熔湯)、湯の凝固、文様割付の分析などの分析を実施することができた。ちなみに、来年度の大会は、中国の武漢にて開催予定とのこと。本学においても、引き続き博物館・学術資料センターを中心とした国際的な研究の推進が期待されるところである。

大田区教育委員会学芸員・学術資料センター共同研究員

教育普及・学術資料センター(神道資料館部門) 公開シンポジウム

古代伊勢齋宮の歴史とまつり

木村 大樹

一、シンポジウムの概要

学術資料センター(神道資料館部門)では、令和六年十一月十六日、「古代伊勢齋宮の歴史とまつり」と題した公開シンポジウムを開催した(共催:JSPS科研費(課題番号23K12025)若手研究「古代天照大神祭祀の構造―伊勢神宮祭祀の実態を中心に―」(代表:塩川哲朗))。本学渋谷キャンパスの常磐松ホールを会場とし、関連の研究者や学生・一般など約百十名が参加した。

本学における近年の齋宮関連のシンポジウムとしては、①平成二十九年(二〇一七)二月十一日に「伊勢神宮と齋宮」(渋谷谷(主催:國學院大學博物館・齋宮歴史博物館)、また、②令和二年二月二十二日に「古代国家「日本」の原点と伊勢齋宮」(主催:齋宮歴史博物館、共催:國學院大學博物館)が開催されている。

公開シンポジウム
古代伊勢齋宮の歴史とまつり

(日時) 2024年11月16日(土) 13時~17時(12時受付開始)
(会場) 國學院大學AMC棟1階 常磐松ホール

タイムテーブル

- 13:00~13:10 開会挨拶
- 13:10~13:30 「齋宮・齋王とは何か?」
木村 大樹 (國學院大學助教授)
- 13:30~14:30 「古代伊勢齋宮の歴史の概観と変遷」
川部 浩司 (三重県教育委員会)
- 14:40~15:40 「古代高野のまつりと伊勢神宮」
塩川 哲朗 (伊勢神宮博物館)
- 15:50~16:10 コメント上
菅 肇 (國學院大學助教授)
- 16:10~17:00 閉会挨拶

【定員】 250名 (先着順、要予約)
【参加費】 無料

主催: 國學院大學 研究開発推進機構 学術資料センター(神道資料館部門)
共催: JSPS 科研費(課題番号23K12025) 若手研究「古代天照大神祭祀の構造―伊勢神宮祭祀の実態を中心に―」(代表:塩川哲朗)
後援: 國學院大學 学術資料センター(神道資料館部門)

から奈良時代の齋王の宮殿の可能性が高い遺構が出土したことを契機とする。過去二度のシンポジウムで得られた知見も踏まえ、齋宮・齋王の理解・研究を深めることを目的とした。さらに、本部門で次年度以降に計画している、奈良時代の天皇・神宮・齋王を含めた天照大神の祭祀に関する研究や、令和九年の「延喜式」撰上一一〇〇年に向けた展示・研究に繋げていくものである。

二、各登壇者の報告

はじめに、木村が本会の趣旨説明を行ったのち、その後の専門的な報告に先立って、「齋宮・齋王とは何か?」と題する導入解説を行った。齋王・齋宮の概要や淵源、さらに日々の生活で重視された齋戒や、天皇祭祀や伊勢神宮祭祀との関連について、基本的な事項を確認した。

続いて、齋宮歴史博物館における上記の調査で責任者を務めていた、川部浩司氏(現・三重県教育委員会社会教育・文化財保護課係長)が、「古代伊勢齋王の宮殿の構造と変遷」と題して考古学的な知見に基づく一つの報告を行った。天武朝における齋王の制度化と天照大神・伊勢神宮の確立との同調や、齋宮の空間整備のモデルに初期内裏や伊勢神宮の構造があったことなどに触れ、さらに齋宮跡の出土遺構に見られる「目隠し堀」を伴う建物、齋王の祭祀に関わる特別な



全体討議の様子

建物であった可能性を考察した。

次に、令和二年のシンポジウムで討議のコーディネーターを務めた塩川哲朗氏(皇學館大学研究開発推進センター准教授、本機構共同研究員)が、「古代齋宮のまつりと伊勢神宮」と題して報告。齋宮で行われる祭祀と齋王が参宮して行われる神宮祭祀について概説し、齋王の天照大神に対する祭祀は、天皇祭祀とも連動し、いずれも「遥拝」によるものであることを考察した。また、齋宮における齋王の新嘗祭について、齋宮跡の出土遺構も検討し、これが内院正殿で行われた可能性を指摘した。

さらに二氏の報告を踏まえ、過去二度のシンポジウムにもコーディネーター・報告者として登壇した笹生衛氏(本学研究開発

推進機構長・神道文化学部教授)がコメント。主に神宮祭祀の空間構成という点における伊勢国の中の多気郡の位置づけ、また齋宮の祭祀施設として特徴的な目隠し堀を伴う建物群と奈良時代の大嘗宮との対応関係、という二つの観点から議論の必要性を提示した。

三、全体討議

討議では、木村が司会を務め、三氏の報告に共通するテーマとして、祭祀における「潔斎」の重要性があることに言及。笹生氏のコメントに対する報告者一名のレスポンスを受けることから議論を行った。

特に、六世紀以来の多気郡が神宮祭祀を支える地域としての位置づけにあったという笹生氏のコメントに基づき、『続日本紀』における七世紀末の「多気大神宮」の記事が、伊勢神宮自体の移動を示すのか否か、という点。また、三氏が共通して取り上げた齋宮の目隠し堀建物と関連して、齋王の新嘗祭が行われた場合は、齋宮内院のどの建物であったのかという点など、最新の発掘状況や近年の大嘗祭関連の研究も参照しながら、熱心な議論が取り交わされた。

最後に、会場の参加者の中から、青木敬氏(本学文学部教授)と岡田莊司氏(本学名誉教授・本機構客員教授)にコメントを求めた。青木氏は、奈良時代の大嘗宮に関して淳仁朝に面期がある点を指摘し、齋宮についても平城宮との比較の必要性を提示した。また岡田氏は、伊勢神宮の鎮座伝承にみえる同床共殿の理念から、これにつながる神宮・天皇祭祀と齋王祭祀との連動性について述べた。

研究開発推進機構助教(特別専任)

霊峰英彦山と地域社会

教育普及・研究開発推進センター「古典文化学」公開講演会

渡邊 卓

令和六年八月二十四日、「古典文化学」の創出研究事業は、TKP小倉シティセンター KOKURAホール（福岡県北九州市）で公開講演会「霊峰英彦山と地域社会」を開催した。

本講演会は、本事業の前身である「古事記学」事業において、宮崎県で開催した国際シンポジウム「古事記と「国家」の形成—古代史と考古学の視点から—」（平成三十年）の研究成果を踏まえ、天孫降臨神話と深い関わりを有する五神宮会（英彦山神宮、霧島神宮、鹿児島神宮、鶴戸神宮、宮崎神宮）と共催のもと、「九州の神話と神社」を主題に令和六年度より三カ年で行っていくものである。

これは國學院大學の『古事記』『万葉集』などの古典研究の成果や九州地方における独自伝承を発信することを目的とする。また、九州地方の神社と連携した学術展開によって、地元の特質を再確認する機会とも位置づけている。

第一回となる本年度は、本学院友会福岡県支部・山口県支部、若木育成会福岡県支部の協力、添田町、添田町教育委員会、JR九州の後援で開催された。当日は、高千穂有昭（英彦山神宮禰宜）、谷口雅博（本学文学部教授・「古典文化学」事業代表）、吉見俊哉（本学観光まちづくり学部教授）の三名が講演を行った。高千穂禰宜は「英彦山の歴史」として、

英彦山および英彦山神宮の歴史について講演した。英彦山は大分県との県境にあり、多くの山々が隣接し、修行する窟も複数ある。年間通して雨が多いため、珍しい動植物が多く、分水嶺として山から海へ続くことから、信仰の山とされてきたのではないかと。また、修験道の隆盛期の室町時代には、日本三大修験道場のひとつでもあったが、明治五年の修験道廃止令によって修験道は衰退し、当時の座主は神主となったなど、英彦山神宮の歴史を説明。現在、英彦山神宮では修験道に因んだ護摩焚きや経読みなども試みられ、また、山の植樹や修験道の峰入りルートの地図アプリ化、宿坊の復元などにも取り組んでいると述べた。



高千穂有昭・禰宜

谷口教授は「『古事記』『日本書紀』にみる天忍穂耳命」として、記紀の神話を比較しながら、英彦山神宮の祭神である忍穂耳命について講演した。記紀の正

勝吾勝勝速日天之忍穂耳命は、ウケヒ神話・葦原中国の平定神話・天孫降臨神話に登場。高天原でのウケヒで天照大御神の子として誕生し、その名はウケヒの勝利を示すと指摘した。また、記紀で忍穂耳命が降臨しない理由については血統という点に注目し、忍穂耳命は天照大御神が男女の生殖活動を介さない方法（「成る」）で誕生させたために実際の血縁はないことを述べ、男女の生殖（「生む」）によって誕生した邇邇芸命によって血統の保証を獲得、さらに別天神である高御産巢日神の血統も取り込み、より強固な皇統の確立も意識していたと考察。そして、「生む」は地上でしか行われない行為で、地上性の付与につながり、天上世界から地上世界への移行段階において、地上性をもつ邇邇芸命に降臨神が交替したのではないかと述べた。



谷口雅博・教授

吉見教授は「精神文化とまちづくり—東京における社寺会堂連携の挑戦—」として、東京の事例を参考にしつつ、二十一世紀で目指すまちづくりについて講演した。日本では総人口が減少しており、さらに東京に人口が集中していることから、地方の人口の減少・衰退が深刻

となり、由々しき事態にあることを説明。その解決のためには価値観を転換させる必要があるとし、これまでの「より速く、より高く、より強く」成長する社会から、「より愉しく、よりしなやかに、より末永く」循環する成熟社会へ転換、古さの中に未来を見出す「古いからこそ新しい」という価値観を二十一世紀の日本の指針とするべきと指摘した。また、東京の湯島天満宮などと連携した取り組みを交えつつ、まちづくりに社寺会堂の精神文化の重要性も説明。二十一世紀のまちづくりとして、人間と自然と持続のための「まち」である文化資源都市を目指すべきと述べた。



吉見俊哉・教授

三名の講演の後には、司会の渡邊卓（本学研究開発推進機構准教授）の進行で鼎談が行われ、英彦山神宮に伝来する古文書のことや、修行・信仰の場の立地的特徴などについての話題が挙がった。会場には神社関係者や研究者、一般など約八十名の来場があり、講演会は盛況の内に幕を閉じた。次年度は霧島神宮・鹿児島神宮の協力のもと、鹿児島県での開催を予定している。

研究開発推進機構准教授

教育普及—日本文化研究所 国際研究フォーラム

つむがれる宗教文化—生み出されるカタリとカタチ

星野靖 一

日本文化研究所は、二〇二四年十二月十五日に国際研究フォーラム「つむがれる宗教文化—生み出されるカタリとカタチ The Weaving of Religious Cultures: Between Words and Things」を開催した。

日時：二〇二四年十二月十五日(日) 十三時半～十七時半

場所：國學院大學渋谷キャンパス 一〇〇周年記念二号館一階 二一〇一教室

発表者・題目：

- ・オリオン・クラウタウ (KLAUTAU, Orion) (東北大学准教授)「和国教主とその教訓：聖徳太子と憲法の近代」
- ・君島彩子 (和光大学講師)「平成時代の仏像と信仰」



- ・ケイトリン・ユゴレツ (UGORETZ, Kaitlyn) (南山大学助教)「現代神道のグローバル化をめぐる諸相」
- ・コメンテーター：
 - ・細田あや子 (新潟大学教授)
 - ・平藤喜久子 (國學院大学教授、日本文化研究所所長)
- 司会：
 - ・星野靖一 (國學院大學教授)
- 使用言語：日本語
- 参加費：無料
- 主催：國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所
- 参加者：約七十名
- 開催趣旨：
 - 「伝統宗教」という言葉があるように、宗教文化には歴史や伝統と関わる面がある。同時に、私たちが生きている今・ここでも、宗教文化は私たちの生活や、社会のあり方と関係しており、またそうであるが故に、変化・変容しながら展開してきていることになる。

文化研究所

参加者：約七十名

開催趣旨：「伝統宗教」という言葉があるように、宗教文化には歴史や伝統と関わる面がある。同時に、私たちが生きている今・ここでも、宗教文化は私たちの生活や、社会のあり方と関係しており、またそうであるが故に、変化・変容しながら展開してきていることになる。

國學院大學

この意味で、伝統宗教の「伝統」とは、過去にあったものが、そのままの形で引き継がれていることだけを意味するので

はない。宗教文化は常に(再)解釈され、実践されているのであり、「伝統」的なあり方を継承しようとするのもまた、積極的な読み換えの営みとして考えることができる。



質疑応答の様子

こうしたことを念頭に置いて、本フォーラムでは、宗教文化が現代において変容しながら、継承されている局面に目を向ける。例えば、人と情報が国境を越えて行き交うグローバル化の状況において、神道はどのようにつむがれているのか。また様々な伝統が読み込まれてきた聖徳太子像について、特に近代において、その教えがどのようなカタリとして取り扱われてきたのか。あるいは、仏教の象徴的なカタチである仏像が、平成という時代状況を受けて、どのように捉え直され、また人々はそのように思っているのか。これらについての報告とコメントを受けて、言葉と物のあわいにおいて立ち現れてくる現代の宗教文化の諸相について、より広く議論を行いたい。」

日本文化研究所では、二〇二〇年から、視覚文化を鍵として宗教文化に考察を加える国際研究フォーラムを連続して開催してきた(「見えざるものたちと日本人」「日本の宗教文化を撮る」「ミュージアムでみせる宗教文化」「見られることと何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」。いずれも報告書をウェブサイトで公開している)。本フォーラムもこの流れを踏まえているが、とりわけ見る／見られるという局面、また「撮る」「記録する」「展示する」といった営みを考えるならば、宗教文化がどのように変容しながら受け継がれていくか、という継承の問題と結びつくことになる。これを受けて本フォーラムは「つむがれる」という言葉を焦点として設定し、聖徳太子・仏像・現代神道について、それぞれの「変容」と「継承」を取り扱った報告を受け、議論を行った。

コメントと質疑では、聖徳太子の描かれ方、読まれ方が、政治的な文脈にも触れながら論じられ、モノとしての仏像や観音像が、どのような経緯で形作られるのかといったことについても議論がなされた。また、報告で取り上げられたグローバル神道について、それ以外にも神道であると自己理解している人々がいることがフロアから指摘され、それを踏まえた上で神道の真正性をどのように考えることができるのか、議論がなされた。関連して、一方ではローカル化、他方では文化の盗用の問題をどう考えるのか、といった事柄についても論じられた。

なお、日本文化研究所では本フォーラムの内容をまとめた報告書を、来年度に刊行予定である。

研究開発推進機構教授

教育普及—研究開発推進センター 第三回しづかカフェ(共生社会×渋谷カフェ)

渋谷の農と食が育むまちづくり

—都市から「未来を耕す」試み!

宮本 誉士

研究開発推進センターでは、令和四年度以降、「(SDGs)と建学の精神」研究事業を推進しており、本学の研究とSDGs (Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」)とを関連づけるとともに、社会貢献・地域連携に資する企画等を実施し、これらの成果を学部教育にも還元することを目指している。

本年度実施した第三回「しづかカフェ」(共生社会×渋谷カフェ)は、こうした本事業の目的に基づき企画したものであり、本学HPにおいてオンデマンド動画(國學院大學公式YouTubeチャンネル、令和七年二月十四日配信)により公開するものである。また、本事業に関連するオムニバス授業「共存・共生の思想」(「國學院の学び(渋谷学)」などの参考動画として用いることで、学部教育にも還元していく。

一、開催趣旨

「しづかカフェ」とは、「共生社会」を考える「渋谷カフェ」の略であり、主に渋谷に通う学生、会社員、来街者、渋谷区民、渋谷に関心のある方々を対象として、SDGs、持続可能な社会、サステナブルな生き方を考える緩やかな学びの場として企画したものである。

第三回「しづかカフェ」の趣旨は、第一回(令和四年度)・第二回(令和五年度)の「しづかカフェ」に続き、渋谷区にお

て定められた「渋谷区環境基本計画」のリーディングプロジェクトとして組織されたシブヤサステナブル推進協議会(通称:「シブヤサ」、事務局:渋谷区環境政策課)によるサステナブルな「まちづくり」を目指す活動に焦点を当て、シブヤサのメンバーと連携しながら、持続可能な渋谷の未来を考えることにある。

以上の趣旨に基づき実施した、第三回「しづかカフェ」では、シブヤサのメンバーであり、渋谷において都市農業を展開する小倉崇氏(NPO法人アーバンファーマーズクラブ代表理事・渋谷区ふれあい植物センター園長)と、松嶋範行氏(シブヤサステナブル推進協議会リーダー)、古沢広祐氏(本機構客員教授)を登壇者に迎え、小倉氏の活動を話題の中心として、「渋谷の農と食が育むまちづくり—都市から「未来を耕す」試み—」をテーマに対話が繰り広げられた。以下、本講座の概要を紹介していくこととしたい。

二、概要

はじめに、松嶋氏は、「シブヤサ」がまく種/育てる意識」と題し、行政のみならず、区民、来街者、事業者も含めて温暖化対策等のサステナブルな活動に参加することを旨とする「渋谷区環境基本計画」に言及した上で、「シブヤサ」の目的は、サステナブルな活動の種をまくことにあると述べた。また、一人一人が自

然からの恩恵を受けて生活できていることを認識し、人と自然との関係性についての現在の意識を変えることが必要であり、それがサステナブルな生き方に繋がると指摘した。

続いて、古沢氏は、「農・食・環境とSDGs」と題し、SDGsの達成状況に言及した上で、気候変動対策、循環経済への移行が急務であることを指摘。その上で、農業、食物、豊かな自然があつてこそ人の命が育まれていること、自然と社会の複合危機が起きている現代において、自然を活かした循環型社会の見直しが重要であると述べた。また、菜園学習による命の繋がりを認識する食育が米国をはじめ各国で行われていることを紹介。さらに、命のもとになる食物を持続可能なものとするため、農村漁村イノベーション、都市農業が重要になっている現在の状況を指摘した。

松嶋氏と古沢氏の話を受けて、小倉氏は、「渋谷×農業」と題し、渋谷における都市農業の様々な取組みと展開について報告した。代表理事を務めるNPO法人アーバンファーマーズクラブ(UFC)については、自分が食べる食物は自分で作ることを目標に、渋谷のビルの屋上などで野菜やお米を仲間達と作り始めたこと、現在、原宿・渋谷・恵比寿に四カ所の畑を開設し、約八三〇名の会員が都市農業を実践していることを紹介。さらに、NPO法人フードバンク渋谷、一般社団法人Matsupieceと提携し、作った野菜を寄付することで社会課題解決にも取り組んでいることを報告した。また、都市の田畑を増やすことで都市緑化の強

化、CO2削減にも寄与できること、家庭から出る生ゴミの堆肥化促進活動により、ゴミを土に還すリサイクル活動も展開していることと言及。これらの活動により、UFCでは、地域活性、食育、環境対策、食料自給を四つの柱として取り組んでいると述べた。そして、UFCの取り組みを活かす形で、渋谷区ふれあい植物センターを「愛でるだけでなく、育てて、食べる植物園」としてリニューアルし、現在、果樹やハーブを栽培していることを報告。これらの活動を通して、多様なアプローチから共感者を生み出すことで、アーバンファーマーミングの実装に取り組んでいると述べた。

さらに、古沢氏×松嶋氏×小倉氏によるトークセッションでは、今後、都市農業を展開するための様々なアイデアやその可能性についての対話が繰り広げられた。また、これらの内容(本編)について、中尾みなみ氏(渋谷区環境政策部環境整備課職員)からは環境政策の視点から、村早彩氏(本学学生、令和六年度後期授業「共存・共生の思想」ファシリテーター)からは学生の視点から、高橋亮一氏(研究開発推進機構ポスドク研究員)からは渋谷学の視点からコメント動画を頂き、統合して公開した(コメント動画は、本編と別撮りで収録)。

なお、以上の内容については、次年度刊行予定の『研究開発推進センター研究紀要』に講座記録として掲載する予定である。

研究開発推進機構教授

出版—國學院大學博物館・学術資料センター—

いそのかみ—少年時代の 大場磐雄と考古同人誌

糸数葉菜[※]・高良未来[※]



一、大場磐雄の少年時代

「神道考古学」を提唱したことで知られる大場磐雄(楽石は、正則中学校(現在の、正則高等学校)、國學院大學を卒業し、神奈川県立第二横浜中学校(現在の神奈川県立横浜翠嵐高等学校) 教諭、内務省神社局考証課嘱託、國學院大學講師などを経て、昭和二十四(一九四九)年に本学教授となった。明治三十二(一八九九)年に生まれてから、昭和三(一九二八)年に母方の大場家を継ぐまでは、谷川の姓を名乗っていたという。そんな谷川少年は、中学生の頃から友人との回覧同人誌を発行していた。大正五(一九一六)年十月から、同六年十二月にかけて編集し

た全十四巻が残る『いそのかみ(石上)』は、『かみつ代研究(上津代研究)』、『採集袋』などに先駆けた最初の本格的な手書き雑誌である。

二、同人誌『いそのかみ』

『いそのかみ』の名は、大和国石上神宮周辺の地名であり、布留、降る、古るなどにかかる枕詞。要するに、古きをたずねる雑誌の意図を示したのであろう。大正五、六年頃における考古学界の動向や、東京と近郊(神奈川県・埼玉・千葉・茨城)を中心とした遺跡踏査の経過も克明に記録されており、考古学史的にも貴重な情報を満載している。各巻は、主に四部構成をとっており、関東各地の遺跡踏査や、考古遺物の採集記録からなる「記事」、谷川自身が創作した小説である「深大寺の露」、論考を発表する場である「論説」、遺跡紹介や遺物紹介、新刊紹介などの「雑談・雑報」で構成されていた。「記事」では、谷川磐雄(バンイウ)の視点から、友人の酒井源太郎(ゲンタロ)、藤枝隆太郎(藤枝氏)、石丸氏とともに東京近辺の様々な遺跡へ出かけ、土器や石器などの考古資料を表面採集した過程について物語調で記録している。谷川少年は、第一巻第一号に「記事—稲敷郡探検記」とある通り、遺跡の踏査を「探検」と呼んだ。そして、自ら「大首長」と称して意気揚々と採集へ向かい、成果

に一喜一憂する姿を描写する。そこには、学生特有の純粹さや、古い時代への関心と憧れがあったように感じられる。

その一方、スコットランド出身の医師・考古学者であり横浜三ツ沢貝塚を発掘したニール・ゴードン・マンローや、かねて私淑してきた人類学者・考古学者である東京帝大人類学教室の鳥居龍蔵(後に本学教授)、本郷弥生町で「弥生」土器を発見した海軍・東京帝大の有坂鋳蔵、そして小説家・探検家にして好古家江見水蔭らとの関係も窺われ、とても中学生とは思えない谷川少年のアンテナの広さに驚かされる。

なお、考古学史的な点について付言すると、マンローの論説をはじめ、東京帝大の坪井正五郎を中心とする「コロポツ



カル論争」に対する反駁の所説も目をひく。本誌からは、日本列島における石器時代の住民は一体どのような人びとだったのか、という問題に関する明治・大正期の空気に触れることもできるだろう、

三、翻刻・編集にあたって

ところで本誌は、昭和五十(一九七五)年に大場磐雄教授が逝去した際、弟子の高安(茂木)雅博客員教授(茨城大学名誉教授)が預かったものであり、近年國學院大學博物館へ寄贈された。博物館の高安客員教授は、大場の命を承けて、既に『楽石雑筆』(雄山閣刊)、『楽石雑筆(続)』(博古研究会)などを翻刻・刊行している。その後、故あって入院を余儀なくされた令和四(二〇二二)年に、これを機として『いそのかみ』の翻刻も行っていたが、この度の寄贈と併せて、広く刊行することとなった。

編集作業は、学術資料センター考古学資料館部門にて実施し、巻末に高安客員教授の解説を付す。装丁は、既刊の『楽石雑筆(続)』に倣い、大場磐雄が残した「記録・考古学史」シリーズを継承する意図を示した。

このほか、大場磐雄が残したアーカイブは、写真、図面、草稿など多岐に亘り、旧日本文化研究所の学術フロンティア事業、オーブンリサーチセンター整備事業などで一部目録化を進めてきたが、引き続き学史的な情報が埋蔵されている資料群の再整理と公開を進めていきたい。

※研究開発推進機構研究補助員・大学院文学研究科博士課程後期

※研究開発推進機構臨時雇員・大学院文学研究科博士課程前期

資料紹介 | 校史・学術資産研究センター

卒業アルバムの整理

比企貴之

一、大学史関係資料の整理

令和三(二〇二二)年以来、校史・学術資産研究センターでは、大学史関連資料の目録整理の在り方を一新するとともにそれを進め、資料の維持と将来への継承とを目的とした保存処置に取り組んできた。とはいえ、いまだ目録化も終わっていない資料や収蔵スペースの都合で一時的に作業を止めざるをえない資料があるなど問題も山積みで、道半ばの状態というのが実情である。

また、こちらの整理の状況とはかかわりなく、大学内外から日々寄せられる大学の歴史にかんする問合せのうち、事実関係の確認に次いで多いのは画像データの請求である。告諭の高解像度デジタルデータが欲しい、明治期の皇典講究所の建物の図版をくれなどというのは頻繁な部類に属すから要領をえたものであるが、〇〇先生の授業風景の写真を探してくれ、キャンパス再開発以前の何処其処の画像データを頂戴と少しニツチなご要望となると、こちらも搜索するところから取り掛からなくてはならない。なしる写真資料の整理は、校史・学術資産研究センターでもようやく作業手順が整えられ、順次進める途についたところの資料であるからである。

二、卒業アルバム類

校史・学術資産研究センターで所管す

る写真資料中、大分なものはやはり大学のオフィシャル写真集たる卒業アルバムである。捲っていくと著名な研究者・教員の新出の肖像写真ははじめ、時代ごとの学生たちの雰囲気、校地の渋谷移転以降のものでは往時の渋谷界隈の情景も収載されている点、斯界に裨益するところ少なからざる資料である。

『國學院大學 第二十回卒業生記念写真帖』(一九二二(明治四十五年)年)

令和六年、校史・学術資産研究センターでは『國學院大學 第二十回卒業生記念写真帖』を購入した。第二十回生、すなわち一九二二(明治四十五年)年六月卒業生のいわゆる卒業アルバムだ。当時は、竹田宮恒久王を総裁に推戴し、学長には侯爵鍋島直大があつたほか、学監杉浦重剛、主事石川岩吉、幹事高山昇、同今井清彦という陣容のもと、各学問分野の碩学らが教員として配置されていた。写真帖には「教場」として、一点の図版が掲載されている。面影から推察するに、この教員は若かりしころの石川のようである。大正元年(一九一二)八月の学制改正にともなう学科担当教員一覧によれば、かれは「国民道德」を担当しているから、儒教についての板書とも整合的で蓋然性は高い(『國學院大學百年史(上)』)。

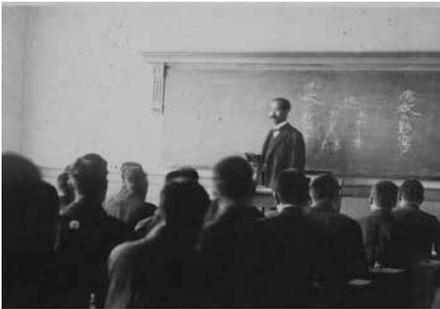
『國學院大學 学部第一回卒業記念(上)』

(一九二五年)

大正七年(一九一八)、第一次世界大戦後の社会変動にたいする対応への必要から、大学令が公布された。いち早く私立大学設立に着手した早稲田、慶應義塾に続き、國學院大學でも学生・院友の陳情や働き掛けにより大学令大学への気運がしだいに高まった。『國學院大學 学部第一回卒業記念』は、新学制下の単科大学となった第一回生(すなわち二十期)の卒業アルバムである。

「屋上より遠景」は、いまの渋谷校地から西側を望む構図だ。富士山がやけに明瞭、かつ日々我われが目にする姿より幾分大きな印象で合成の可能性も考えられる。富士山以外の部分は、当時の渋谷校地周辺の景観を伝えるものである。直下左手は氷川神社であろうか。

校旗とともに「見はるかすもの……」で始まる建学の精神を歌いあげた校歌が制定されたのは、この前年のことであった。大学令大学への移行前後をつうじ社



教場 (石川岩吉)



昭和4年の渋谷駅 山手線高架(旧大山街道)上から渋谷駅と八千代前広場を俯瞰する。中央奥に「玉川電車」の看板がみえる。



屋上より遠景

会・大学はめまぐるしくその姿を変容させつつあつた。飯田町からの校地移転もその一つである。「屋上より遠景」の一枚には、新たに大学令大学となったことの歓喜と自負の万感を感じずにはいられない。

研究開発推進機構助教(特別専任)

彙報

会議

■全体

- ・令和6年度第2回運営委員会、令和6年9月19日(木)、若木タワー4階会議室05
- ・令和6年度第3回運営委員会、令和6年11月20日(水)、若木タワー4階会議室05
- ・令和6年度第4回運営委員会、令和7年1月9日(木)、若木タワー地下1階会議室02
- ・令和6年度第2回企画委員会、令和6年7月3日(水)、AMC棟5階会議室06
- ・令和6年度第3回企画委員会、令和6年9月13日(金)、AMC棟5階会議室06
- ・令和6年度第4回企画委員会、令和6年11月6日(水)、AMC棟5階会議室06
- ・令和6年度第5回企画委員会、令和7年1月15日(水)、AMC棟5階会議室06
- ・令和6年度第2回人事委員会、令和6年11月12日(火)、AMC棟5階会議室06
- ・令和6年度第3回人事委員会、令和7年1月30日(木)、若木タワー4階会議室05
- ・令和6年度第2回教員等資格審査委員会、令和6年11月12日(火)、AM

- ・C棟5階会議室06
- ・令和6年度第3回教員等資格審査委員会、令和7年1月30日(木)、若木タワー4階会議室05
- 日本文化研究所
 - ・令和6年度第2回所員会議、令和6年6月19日(金)、オンライン会議
 - ・令和6年度第3回所員会議、令和6年8月30日(金)、オンライン会議
 - ・令和6年度第4回所員会議、令和6年10月30日(水)、メール審議
 - ・令和6年度第5回所員会議、令和6年12月18日(水)、オンライン会議

- 学術資料センター
 - ・令和6年度第2回学術資料センター会議、令和6年8月29日(木)、AMC棟5階プロジェクトルーム2
 - ・令和6年度第3回学術資料センター会議、令和6年12月23日(月)、メール審議
- 校史・学術資産研究センター
 - ・令和6年度第2回校史・学術資産研究センター会議、令和6年8月28日(水)、オンライン会議
 - ・令和6年度第3回校史・学術資産研究センター会議、令和6年12月13日(金)、メール審議
- 研究開発推進センター
 - ・令和6年度第2回研究開発推進センター会議、令和6年8月28日(水)、オンライン会議
 - ・令和6年度第3回研究開発推進センター会議、令和6年12月18日(水)、メール審議
- 國學院大學博物館
 - ・令和6年度第1回國學院大學博物館

- ・会議、令和6年8月31日(土)、メール審議
- ・令和6年度第2回國學院大學博物館会議、令和6年12月24日(火)、持ち回り稟議

公開講座

■全体

- ・第49回 日本文化を知る講座「祭り・信仰と地域」、令和6年7月20日(土) 14:00~17:00、AMC棟1階常磐松ホール、講師||笹生衛(國學院大學神道文化学部教授・研究開発推進機構長)「神輿・祭礼の発生と展開」、小林稔(國學院大學観光まちづくり学部教授)「祭り・継承・まちづくり」、黒崎浩行(國學院大學神道文化学部教授)「神輿がつなぐ地域のいまと未来」
- ・令和6年度 國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会「現代社会と自然災害における神社」、令和6年11月30日(土) 15:00~16:30、AMC棟1階常磐松ホール、講師||稲場圭信(大阪大学大学院教授)
- 日本文化研究所
 - ・国際研究フォーラム「つむがれる宗教文化…生み出されるカタリとカタチ」、令和6年12月15日(日) 13:30~17:30、120周年記念2号館 1階2101教室、報告者||ケイトリン・ユゴレツ(南山大学助教)「現代神道のグローバル化をめぐる諸相」、君島彩子(和光大学講師)「平成時代の仏像と信仰」、オリオン・クラウタウ(東北大学准教授)「和国教主とその教訓」

- ・聖徳太子と憲法の近代」、コメント||平藤喜久子(國學院大學神道文化学部教授・日本文化研究所長)・細田あや子(新潟大学教授)
- 学術資料センター
 - ・公開シンポジウム「古代伊勢斎宮の歴史とまつり」、令和6年11月16日(土) 13:00~17:00、AMC棟1階常磐松ホール、講師||木村大樹(國學院大學研究開発推進機構助教)「斎宮・斎王とは何か?」、川部浩司(三重県教育委員会)「古代伊勢斎王の宮殿の構造と変遷」、塩川哲朗(皇學館大学准教授)「古代斎宮のまつりと伊勢神宮」、コメント||笹生衛(國學院大學神道文化学部教授・研究開発推進機構長)

- 研究開発推進センター
 - ・國學院大學「古典文化学」の創出事業「九州の神話と神社」公開講演会「霊峰英彦山と地域社会」、令和6年8月24日(土) 13:30~16:00、福岡県北九州市、講師||高千穂有昭(英彦山神宮禰宜)「英彦山の歴史」、谷口雅博(國學院大學文学部教授)「古事記」『日本書紀』にみる天忍穗耳命、吉見俊哉(國學院大學観光まちづくり学部教授)「精神文化とまちづくりー東京における社寺会堂連携の挑戦ー」
- 國學院大學博物館
 - ・國學院大學博物館共催・アジア鑄造技術史学会2024東京大会、令和6年9月14日(土)・15日(日)、BMC棟1階常磐松ホール、研究発表||楠惠美子(大田区教育委員会)・渡邊緩子(日鉄テクノロジー株式会社文化

財調査室長)・隅英彦(日鉄テクノロジー株式会社文化財調査室)・平尾良光(帝京大学文化財研究所客員教授)・深澤太郎(國學院大學研究所客員教授)・深澤太郎(國學院大學所蔵伝滋賀県大岩山出土銅鐸の鉛同位体比分析―突線鈕式銅鐸からみた弥生時代中期末から後期における青銅器の製作と埋納―)ほか19本

出張

■学術資料センター

・深澤太郎・吉永博彰、「伊豆半島における日本ジオパーク委員会による現地調査への対応協力」のため、令和6年8月22日(木)、静岡県熱海市・三島市
 ・木村大樹、「皇學館大学 神道研究所との打ち合わせ、および奈良・大嘗祭木簡に関する調査」のため、令和6年10月25日(金)〜10月26日(土)、三重県伊勢市・明和町、奈良県奈良市
 ・岡田莊司・木村大樹・高橋あかね、「京都・吉田神社および吉田家墓所の調査」のため、令和6年11月1日(金)〜11月3日(日)、京都府京都市
 ・深澤太郎、「美伊豆主催「伊豆峯辺路ヲカタル」「伊豆峯辺路ヲアルク」出講」のため、令和6年11月16日(土)〜11月17日(日)、静岡県熱海市
 ・深澤太郎・吉永博彰、「伊豆半島ジオガイド養成講座への対応協力(講師)」のため、令和6年11月24日(日)、静岡県伊豆市

■研究開発推進センター

・渡邊卓・半田竜介・鶴橋辰成・谷口雅博・吉見俊哉・志水志保、「令和6年度「古典文化学」公開講演会「靈峰英彦」と地域社会」実施・運営」のため、令和6年8月23日(金)〜8月25日(日)、福岡県北九州市・田川郡添田町
 ■國學院大學博物館
 ・池田榮史・深澤太郎、「特別展「文永の役750年 Part 1」にかかる集荷・輸送および次展示にかかる資料調査」のため、令和6年9月3日(火)〜9月6日(金)、福岡県福岡市、長崎県松浦市

■学術資料センター

・深澤太郎、「西南学院大学博物館における相互貸借特集展示の展示替および柳田康雄資料の整理等」のため、令和6年10月18日(金)〜10月19日(土)、福岡県福岡市・糸島市
 ・深澤太郎・佐々木理良、「令和7年度企画展の資料調査ならびにプリンカラ研修会参加」のため、令和6年11月7日(木)〜11月8日(金)、北海道白老町
 ・池田榮史・深澤太郎、「特別展「文永の役750年 Part 2 絵詞に探るモンゴル襲来」に係る借用資料集荷・輸送」のため、令和6年11月11日(月)〜14日(木)、熊本県菊池市
 ・内川隆志、「第72回全国大学博物館大会参加」のため、令和6年11月27日(水)〜11月29日(金)、長野県松本市
 ・池田榮史・尾上周平、「特別展「文永の役750年 Part 1 海底に眠るモンゴル襲来」に係る借用資料返却・輸送」のため、令和6年12月11日(水)

〜12月14日(土)、長崎県松浦市

刊行物

■全体
 ・研究開発推進機構「機構ニュース」通号35(令和6年6月30日発行)
 ■日本文化研究所
 ・日本文化研究所「日本文化研究所年報」17号(令和6年9月30日発行)

計報

■朱岩石 客員教授



本機構客員教授である朱岩石中国社会科学研究所研究員・元副所長に

かれては、かねて療養中のところ、二〇二四年十月十八日午前、中華人民共和国北京市にて

ご逝去された。享年六十二歳。専門は、東アジアにおける都城の研究や、仏教考古学、シルクロード考古学。一九六二年生。一九八四年に北京大学考古系を卒業後、中国社会科学院考古研究所に奉職。

一九九七年より國學院大學大学院に留学して故吉田恵二教授に師事。二〇〇〇年には、大学院文学研究科博士課程後期を修了し、「古代中国都城と日本早期都城の比較研究」にて博士(歴史学)の学位を取得した。帰国後は、漢唐考古研究室主任、副所長などの要職を歴任。中国社会科学院研究生院・中国社会科学院大学

教授として博士課程の指導も担当したほか、鄴城工作隊長、中国・ウズベキスタン連合考古隊隊長なども務めた。

編集委員会より

既にお気付きのことかと思うが、前号より本誌をリニューアルした。これまで、主に六月号に機関毎の年度研究計画、二月号に事業報告といった形で誌面を組んできたが、「読み物」としての面白さを欠いていた反省に立っている。

そこで参考にしたのは、本誌の前身誌と言っても良い旧日本文化研究所の『所報』。事業報告のみならず、研究ノート、エッセイ等を満載し、年間六回発行していたのだ。最終面の「往還」、すなわち構成員の近況を知らせるコラム欄もあり、本号からこれも復活させた。機構のいま、そして構成員の顔が見える誌面を目指していきたいと考えているので、新しい『ニュース』に期待を寄せて頂ければ幸いです。

ちなみに、この二〇二五年は、旧日文化研が発足してから七十年の節目。戦後間もなくの当時から憂慮されてきた「文化的虚脱と道徳的無感覚」は、むしろ今日的な課題でもある。「周辺民族文化との同化複合によって醇化された」日本文化について、「歴史と伝統の異なる文化との比較研究において、始めて他に対する共通性や特異性が指摘され、その文化特質が明らかにされる」という方法論のもと、「内外の文運に寄与する」ことが、我々の使命であることを再確認する一年にしたいものだ。(F&K)

往還

令和六(二〇二四)年は鎌倉時代の文永の役(一二七四年)からちょうど七五〇年目である。そこで本學博物館ではこれを契機として、二つの特別展「海底に眠るモンゴル襲来」「水中考古学の世界」(会期:九月二十一日(土)~十一月二十四日(日))と、「絵詞に探るモンゴル襲来」「蒙古襲来絵詞の世界」(会期:十一月三十日(土)~令和七年二月十六日(日))を開催することとした。



池田 榮史

市鷹島海底遺跡での水中考古学手法による元軍船に関する調査成果と今日における水中考古学研究の現況と課題を明らかにすること、後者は本学文学部内川隆志教授(研究開発推進機構兼任教授)が調査研究中の埼玉県熊谷市根岸家に伝わる文化財の中から発見した『蒙古襲来絵詞』模写本を紹介し、その位置付けを明らかにすることを目的として企画したものである。

なお、両特別展には元軍船団潰滅海域である伊万里湾の鷹島海底遺跡を管轄する長崎県松浦市及び松浦市教育委員会に共催いただき、多くの資料提供及び開催中の催しに対する全面的な協力をいただいた。

いた。

前者「海底に眠るモンゴル襲来」は、「第一章水中考古学とは」、「第二章モンゴル襲来」、「第三章鷹島海底遺跡の調査」、「第四章明らかになったモンゴル襲来」、「第五章これからの鷹島海底遺跡」の五章による展示構成である。水中考古学研究方法とモンゴル襲来関連遺跡である鷹島海底遺跡及びその調査の概要と調査成果、今後の課題などについて、紹介することを意図した。また、展示内容を詳しく解説した展示図録では冒頭に「モンゴル・元の遺跡を訪ねる旅」の一文を付して、モンゴル帝国の形成過程と日本へのモンゴル襲来が行われるまでの歩み

モンゴル襲来750年

をまとめた。

開催初日には松浦市友田吉泰市長、國學院大學佐柳正三理事長並びに武智浩二常務理事に隣席いただいで開展式を行った。また、開催日から三日間にわたっては、松浦市教育委員会文化財課内野義課長並びに早田晴樹学芸員によるワークショップ「VRで水中考古学を体験!!」が行われた。このワークショップは一日十五名の申込者を募った定員制で実施したが、参加者からは大変な好評をいただいた。

十月十三日(日)午後には筆者によるミュージアムトークを開催したところ、一五〇名以上の聴取者があり、立見をお

願いせざるを得ない状況となった。

さらに十一月九日(土)午後には常磐松ホールを会場として、モンゴル人民共和国の大学や博物館、文化財関係者五名を招いたシンポジウム「モンゴル人研究者から見たモンゴル襲来」を開催した。シンポジウムではモンゴル国立文化遺産センターのアンボルト・アンフサナー遺跡保存室長「モンゴルにおける水中考古学発掘調査出土遺物の研究及び保護の可能性」、モンゴル科学アカデミー考古学研究所のソルバラム・フレルスへ中世モンゴル帝国研究室長「元時代におけるモンゴルと日本に現存する武器の比較」、モンゴル国立大学ウランバヤル・エルデネバト人類学・考古学部長並びにモンゴル国立カラコルム博物館テルビシ・バヤラー館長「鷹島海底遺跡から出土した元時代の遺物とモンゴル帝国時代のカラコルム首都から出土した遺物の比較」の発表が行われた。それぞれの発表ではモンゴル国内での調査資料がパワーポイント画像で紹介された後、これと日本側の関連資料に関するモンゴル研究者による比較検討が行われ、日本で初めて公開される資料に驚きの声が上がった。

池田 榮史

発表の後、発表者に関する筆者からの質問とこれを受けたモンゴル研究者による質疑応答による討議が行われ、双方の理解の共通点や相違点の抽出とともに、今後の共同研究の必要性を確認した。会場には事前申し込みによって人数制限したものの、二〇〇名を超す熱心な聴衆者があった。

「海底に眠るモンゴル襲来」は五十九日間の開催期間中に一日平均約二五〇人、総計約一五、〇〇〇名の入館者があり、盛會裡に終了を迎えることができ、特別展としての面目を保った。

後者「絵詞に探るモンゴル襲来」では、前述した埼玉県根岸家に伝わる『蒙古襲来絵詞』模写本三巻と、熊本県菊池神社所蔵の『蒙古襲来絵詞』模写本三巻を借りして、全巻公開を行うこととした。「第一章『蒙古襲来絵詞』とは」、「第二章『蒙古襲来絵詞』菊池神社本と根岸家本」、「第三章描かれたモンゴル襲来」、「第四章『神風』をめぐる神と人」、「第五章國學院大學とモンゴル襲来研究」、「第六章『蒙古襲来絵詞』研究のこれから」の構成であり、展示解説図録の冒頭に「『蒙古襲来絵詞』を訪ねる旅」を採録した。これにより、『蒙古襲来絵詞』の内容とこれまでに制作されてきた約五十種以上の模写本の分類と年代的位置付け、それぞれの特徴などについて明らかにするとともに、今後の『蒙古襲来絵詞』研究について展望した。

なお、借用した菊池神社本・根岸家本『蒙古襲来絵詞』はともに三巻仕立てであることから、三週間ごとに展示替えを行い、会期中に全巻公開を行なうこととした。また、これに合わせて十二月七日(土)、令和七年一月十一日(土)及び二月一日(土)にそれぞれの内容に合わせたミュージアムトークを行なっている。

『蒙古襲来絵詞』は三の丸尚蔵館が所蔵する国宝本は広く知られているものの、多くの模写本は余り知られていない。本特別展では新たに発見した根岸家本とともに、肥後細川藩絵師福田太華による江戸時代の模写本である菊池神社本を並べて展示公開することにより、今後の『蒙古襲来絵詞』の各模写本とその内容の研究に寄与することを企図している。

研究開発推進機構教授